

サイパンとアメリカ合衆国の関係：加速する「連邦化」

(原案 国際交流学科2年 安田 圭佑)

国際環境におけるサイパンのアイデンティを考えるのは、非常に難しい。というのも、サイパンとアメリカ合衆国（以下米国と表記）の関係が複雑きわまるものだからだ。サイパンというのが単一の統治形態ではない。グアム島を除く全14島からなるマリアナ諸島から構成されるのが「北マリアナ諸島および北マリアナ諸島政府(The Commonwealth of the Northern Mariana Islands)」であり、その首都を擁し中枢的機能を果たしているのがサイパンなのだ。戦前、サイパンは日本の植民地だった。これは「満州国」などと異なり、国際連盟が正式に承認した「委任統治領」だ。戦後サイパンは、米国の「信託統治領」となるが、これも要するに植民地的制度に変わらない。つまりサイパンは、スペイン、ドイツ、日本、米国に次から次へと支配統治されていったのだ。この報告書では、サイパンと米国の複雑な関係を整理し、現在サイパンが直面する政治・経済・文化的な問題の所在を明確にしたい。

そもそも米国のサイパンへの関わりは、太平洋戦争時、日本が防衛していた同島を攻略、陥落させ、軍事占領したことに始まる。米国にとってこの地域は、日本との熾烈な戦いの結果確保したもので、戦後安全保障のために重要な戦略拠点と位置づけた。それで1947年、米国はサイパンを含むミクロネシアを国連信託統治領としつつも、1951年までは米海軍による軍政を続けた。その後、米国大統領が任命する高等弁務官が、現地の最高責任者として統治する形式に移行したが、1960年代全世界的に「脱植民地運動」が起こると、ミクロネシアの住民は自治権拡大要求を強める。その過程で北マリアナ諸島は他地区と別れて米国と別個の交渉をはじめ、1975年、「米国との政治的結合である北マリアナ諸島コモンウェルス」を創設する盟約（Covenant to Establish a Commonwealth of the Northern Mariana Islands in Political Union with the United States of America）が締結され、その結果1978年、北マリアナ諸島は米国の主権下における内政自治領となった。ミクロネシアの他の地区も、マーシャル諸島共和国、ミクロネシア連邦、パラオ共和国としてそれぞれ自治政府を発足させていったが、北マリアナ諸島のみが、米国のコモンウェルス（Commonwealth）として、事実上米国領の扱いを受けることになった。ちなみに矛盾するようだが、国際連合が北マリアナ諸島に対する信託統治の終結を認めたのは1990年のことである。

米国の自治領というのは不思議な性格を持つ。Commonwealth という語の訳が「米国自治区」にあたるのだが、これは米国が「属領」または「保護領」として海外に

所有する領土のことで、現在はプエルトリコと、北マリアナ諸島の2地域がこれにあたる。住民は米国国籍を保有し、米国政府発行のパスポートを持つ。自治政府による内政は認められており、独自の憲法を用いて、民選の知事（首相）と議会を有する。独自の国旗、国家（自治領歌）も持つ。但し主権はあくまで米国にあり、国家元首は米国大統領で、しかも米国憲法、法律、条約が適応される。このような二元性の具体的な例をあげると、教育・医療・健康保険・郵便に関しては米国制度が適応されるが、労働法・出入国管理などは米国の法律に縛られない、ということになる。（但しこの特性は、2009年以降大幅に改正される。詳細は後で述べる。）一方、国防と外交に関する責任と権限は、完全に米国がコントロールし、米軍は必要であれば土地を収用する権利を持つ。このように北マリアナ諸島は、米国領土の一部のような、独立国のような、非常にあいまいなところなのだ。

今回の研修で、5日間サイパンを駆け巡ったが、アジア太平洋の多様な人種・民族が様々な理由からサイパンに定住して生活している様子を垣間見ると、サイパンとして独自に存在している印象の方が強かった。その一方、迫り来る米国の影を感じる時もあった。ビーチからフィリピン海を眺めると沖合いには常に米軍の貨物船が5-6隻停泊している。武器弾薬を積んでいるらしいが、島民のための非常時用食料・飲料水なども積んでいるそうだ。サイパンを守っているのだろうが、太平洋戦争のとき米軍が島を包囲した様子が思い浮かび、どうも落ち着かない。

2008年、北マリアナ諸島に対する米国の直接統治が増大することになった。最大の変化は、2008年5月に成立した北マリアナ諸島への米国移民法適用で、その背景には米国の経済・治安対策があった。

それまで北マリアナ諸島は自治領として、入国管理を独自に行なってきた。これはサイパン経済にとって有利なことだった。フィリピン、バングラデッシュ、中国などから容易に移民を招き入れ、就労ビザを与え、安価な労働力として利用する。サイパンの縫製業界は、米国本土の2分の1の最低賃金で彼らを雇い、“Made in USA”レベルをつけたTシャツや衣料を低コストで生産し、米国本土に「輸出」することで成功した。ところがこれに反感を持ったブッシュ政権下の米国議会は、北マリアナ諸島政府に最低賃金を米国水準まで引き上げるよう圧力をかけた。その結果、2007年初め頃からサイパンの縫製工場は苦境に陥り、2008年に入ると次々と閉鎖され、職を失った中国人労働者の多くが不法滞在者としてサイパンに居残る事態をひき起こす。ここに北マリアナ政府は、2009年6月1日から、入国管理に米国の厳格な連邦移民法を適用するに至ったのである。これを「連邦化」と呼ぶ。米国政府は、2001年の9-11事件以来、テロリストの入国に敏感になっており、中国・ロシア・イスラム圏などからの（密）入国者がいともたやすくサイパン経由で米国本土に渡ることを警戒していたこともあり、北マリアナ諸島への入国管理を直接手がけることになったのだ。

一方この変化に伴い、北マリアナ諸島には、米下院議会への代表議席（票決権なし）

が認められ、2008年11月4日に初代議員が選出されることになった。2008年の夏、私たちがサイパンを訪れたとき、島のあちこちで立候補者のポスターを見た。在サイパンの米連邦政府機関としては、米連邦地方裁判所、米連邦政府の内務、労務、農務、司法、国防総、国土安全保障の各省及び国際放送局、郵政公社、社会保障局、全国労働関係委員会などの出先機関があり「アメリカ人」が働いているが、「連邦化」に伴って今後ますますサイパンには、「アメリカ人」住民が増えると思われる。

さらに、北マリアナ諸島における米軍の影響力も増大している。近年フィリピンだけでなく、日本、韓国など米軍撤退を希望しており、それが実現した場合米軍はサイパン周辺で駐屯、演習を行う可能性があるらしい。北マリアナ政府は、経済効果を見込んで、米軍基地の誘致に積極的な態度を採っているらしい。しかし、現在北マリアナ諸島で米軍に関係していることと言えば、テナアン島の北部2/3を訓練用に提供しているのと、フィリピン海沖に武器弾薬船舶を停泊させていることくらいしかない。それでも、財政難にあえぐ北マリアナ政府にとっては、これらの賃貸料（補償費）は大切な収入源となっているという。

こうした傾向に伴い、不景気にあえぐ北マリアナ諸島の住民が米軍を就職口として考える現象が起り始めたらしい。今米軍に入隊すれば、イラクなどの危険地域に派兵される可能性も高いにも関わらずだ。ちなみに、2006年8月までにマリアナ諸島を含むミクロネシア地区からは約2,800人が出兵している。北マリアナ諸島出身者で、イラクで命を落とした兵士も、腕や足を失ったものも、後遺症に苦しむものもいるという。サイパンの「連邦化」は、米国の軍事戦略への本格的なコミットメントをも意味する。

サイパンには、米国を警戒し干渉を嫌がる人もいれば、逆に米国の介入を歓迎する声も多くあるようだ。経済苦境を打破できない北マリアナ政府に嫌気がさしている住民によると、「連邦化」によって米国政府が地元のふがない政治家たちに喝を入れてくれる、と期待しているとのことだった。このような状況は、かつての日本によるサイパン統治と似ている点もあるような気もして、私たちゼミ生はなんとも複雑な気持ちになった。かつて日本統治時代に、松江春次がサイパンでシュガー・ビジネスを成功させたのも「革命的な外からの経済参入」だったのだろうか。今後サイパンは、「サイパン＝米国」という地位を利用して、米国の援助などに期待しつつ経済危機の打開策を探していくのかもしれない。

サイパンで加速する「連邦化」は、今回サイパン研修で見てきた中では教育の面でも顕著に思えた。サイパンでは米国の教育課程による教育が実施されており、小学校6年制、中学校2年制、高校4年制となっている。義務教育は6才から16才と制定されている。サイパンやグアムにも大学はあるが、野心を持つ学生は、米国本土の大学への進学を目指す。

私たちゼミ生は 新設のラデラ・インターナショナル・スクール (Ladera

International School of Saipan) という施設を訪問した。この学校では現地の学生と、アジア諸国、ロシアなどからの留学生と一緒に学び、通学生以外には寮が完備され、授業後のチューター制度も万全、教員は米国での豊かな教育経験を持つ人たちが揃っている。生徒はこの学校で徹底した米国式の教育を受け、米国本土の大学への進学を目指す。英語教育に熱心な韓国からの留学生が多いようだが、チャモロやカロリニアン（または 寂しさ・儂さみたいなもの）を感じたのも事実だ。 キャンパスを訪問したのは、9月11日で、私たちが帰途につこうとした直前、校庭に星条旗が掲げられ「同時テロ犠牲者追悼式」が始まった。やはりここは米国の学校だと思った。

サイパンという島は普通に街を歩けば、太平洋戦争時に米国と日本が戦った残骸が普通に目に入り、あちこちに存在する戦争犠牲者の慰霊碑や墓などに60年前の日米戦争の傷を残しているようにも感じられる。だが日本の支配についてうまく理解・消化をしてこないまま、今また米国に呑み込まれつつある。私たちが日本人だからなのかどうなのかはわからないが、私たちがサイパンで感じた「米国」の存在は、どうも鳥肌を誘うような、叫びたくなる対象のような、祈りたくなるような、不可解なものだった。

参考文献

- * 在サイパン駐在官事務所「北マリアナ諸島概況」（平成20年8月編纂）
[今回の研修で日本領事館を訪問した際、領事のご好意でゼミ生全員に配布された。]
- * 中島洋「Commonwealth とは？」『やしの実大学：ミクロネシア ミクロネシア講座』
<http://www.yashinomi.to/micronesia/no9.html>
- * 「やしの実ニュース 太平洋情報」『やしの実大学』
<http://www.yashinomi.to/news/news.html>
- * 「#159 PTSDに苦しむチャモロ帰還兵たち」「#169 さんご礁沖に浮ぶ怪しい貨物船」
「#190 USアーミーは人気の就職先？」 いずれも『北マリアナ諸島（ロタ&テニアン&サイパン）ローカル情報満載ファイル— KFC Triathlon Club ブログ』による。
http://www.kfctriathlon.jp/html/island_local_151.html
- * Ladera International School of SaipanのURL は <http://www.myliiss.com/>



北マリアナ諸島自治領旗 (Wikipedia「北マリアナ諸島の旗」より転載)



北マリアナ諸島の国花、フレイムツリー (火焰樹または南洋桜)



1. フィリピン海沖に停泊する米軍船舶。(右手前に浮かぶのは、マニャガハ島)



2. 米国仕様の郵便局。 海外からサイパンに送る手紙には、最後に USA と付け足す。



3. 2008 年中、観光業に代わってサイパン経済を支えた縫製工場が次々に閉鎖されていった。



4. 縫製工場で働く移民のアパートだったところ。 2008年9月にはもぬけの殻だった。工場閉鎖とともに住人たちは家賃滞納のまま夜逃げしたそうだ。



5. 米下院議員選挙にむけての候補者ポスターが目立つ。(2008年9月)



6. 朝鮮、ベトナム、イラクなどで米国のために戦ったサイパン出身の退役軍人クラブ (VFW)。